

家と家族

——思い出は何のためにあるのか

後編

佐藤浩司

(建築人類学・建築史学、国立民族学博物館)

インターネットやユビキタスといったテクノロジーの登場により人間関係のありかたにも大きな変化が起り始めている。家とそこに住む人を建築人類学という独自の視点で研究し続ける佐藤浩司氏を訪ね、その研究から見えてきたものについて語つてもらつた。

聞き手
田村和彦

(関西学院大学教授・関西学院大学出版会編集長)

「思い出」なんです。社会の歴史は一種のイデオロギーですから、そこを覆していくための戦略として思い出をとらえているんです。

田村 記憶というのは歴史学でも言われています。ピエール・ノラ編の『記憶の場』とか。アンダーソンが『想像の共同体』をつくる上での記憶づくり、大衆的な記憶づくり、あるいは公の立場からの記憶づくりをとりあげて以来の動きです。建築もその中に取り込まれてきたわけですよね。

佐藤 建築家はまさにその記憶づくりに役立っていた。ある空間の中で濃密な社会を築かなければいけないという、一種のイデオロギーというか、幻想のもとにそれをやっていた。そこを覆して否定してしまえば、ある空間的な境地という中に入る人間が、無理をしてひとつの目的をもつて生きる必要は全くない。現実に日本という国の中にいるのは、ある価値を共有している人たちばかりではないの

※思い出はどこに行くのか? ——ユビキタス社会の物と家庭にかんする研究会

<http://www.yunoka.com/>

【個人化するヒストリー】

田村 佐藤さんが今とりくまれているユビキタスの研究会で、自分の見たものを全部何十万枚という画像ファイルに取り込んでいくという面白い実験をしている人のことが紹介されていますね。

佐藤 美嶋薰さんね。彼は記録魔なんですが、見えるところに何も置きたくない

と言つて、自分の見たモノを全部スキヤナで取り込んで、取り込んだモノは捨ててしまうんです。そうして取り込んだ画像を毎日2秒に一回見ていて、一周するのに一ヶ月くらいかかる。

田村 その話をある人にしたら「それは記録じゃないか」と言うんです。記憶と記録とはどう違うんでしよう。

佐藤 記録は記録でしかない。思い返すことによつて初めてその個人にとっての価値が生じてくる。記録という次元で言えば、個人が一生の間に見たり聞いたりしたものは全て記録できるそうです。何

だし、そういう多様な人間が集まつて国家というものができいて、国家についての目的は価値の共同体ではないということを素直に認めればいい。今までとは全く別な、ルーズな共同性を求めていけばいいだけだと僕は思つてゐる。

田村 国境や国家の越えかたなどいうこともなるんでしょうか。

佐藤 僕はまず個人の領域で切り崩していくこうとして、だからこそ「2002年ソウルスタイル」展でやつたような、冷蔵庫の中のものを調べたりとか、とんでもなくつまらないところからなし崩しにしていくこうとしている。

田村 ヒストリーというのを限りなく個人化して、ミクロ・ヒストリーみたいなものにしていくんですね。

佐藤 人間は社会的な生物で、社会の価値を共有しない限り自分の価値も認められないという前提があるから歴史が存在する必然性もある。社会の歴史を理解しても自分の生きざまがわからないのな

ら、無理してそれに従う必要はない。むしろ必要なのは「いかに生きるか」とか「自分とは何か」を知るための手段でしょ。それが「思い出」とか、モノの価値を見いだしていくところから開けていかないかなと思つてゐるんです。

【ユビキタス社会】

田村 ユビキタス社会はテクノロジーに全部支配されてしまうような管理社会として捉えられることが多いようですが。

佐藤 ユビキタスの開発に携わっている人々は、ユニバーサルな社会イメージをもつてゐるけれど、僕らは「そうじゃないでしょ」と言おうとしている。ユビキタスになったとたんにモノの価値はほとんどなく多様になるはずですよ。ユビキタスはそれを受け入れるようなテクノロジーですから。インターネットがユニバーサルだと思われていたのが、こんなに個々の人間が発言するようになったのと同じで、ユビキタスつてユニバーサル

なものの対極にあるんじゃないかなって思っています。

【空間と人間関係】

田村 以前読んだ本(Margaret Wertheim, "The Pearly Gates of Cyberspace" 1999)

に書かれていたのですが、インターネットの中では、身分、国籍、肌の色、ジエンドーといったものが全部消え去つて透明な人格として存在できる。さらにそれを突き詰めると、生きていくことと死んでいくことの差もなくなる。バーチャルな空間の中で相手にとつては自分の不死というものを実現できると思つていても真面目にいるという話がでてきました。

佐藤 人間の親密度を測る基準でいうと、親密な人たちの間では不死でいることはできると僕も思いますよ。しかし現実にその人と同じ空間を共有している人たちにとってはやっぱり死ぬわけです。死体の始末はしなければいけないし、歳をとつたら介護しなくてはいけないし、

現実的な問題がある。空間的な人間関係をどうするかが問題だというのは、そちらに注目しましようということをいつているのです。

田村 空間が全くなくなってしまうわけではないですね。

佐藤 肉体を持つている限り空間はなくならない。空間を共有している人たちとどういう関係を築くかは別の話として残る。かつてそれは同じもの、パラレルなものと思われていましたが、そうではなくってきたのだから、むしろ空間的なことをどうするかが大切だうと思つているんです。

田村 インドネシアの住居の話の中でも死というものがでてきましたが、家といふ空間の中で死という物語をどう処理するのかは、今までずっと問題になつてきただわけですね。

佐藤 農耕民なら人が死ねば儀礼をおこなつて家中で祀つてしまし、狩猟採集民なら家や集落を捨てて逃げることで處

理してきた。現代のネット社会だつたらネット葬儀なんかもあつて、それが実現できてしまう。いわゆる「バーチャルとリアルな世界」という対比ではなく、主張したいのは「空間と人間関係はバラレルではなくた」それだけだと思つているんです。単に空間から離れた人間関係のことをバーチャルとよんでいるとそれはとんでもないことで、空間を離れて空間的な人間関係を築くところですか

で空間的な人間関係を築くところであります。そこに関わっているんですよ。

【ノスタルジーについて】

田村 少し前、ドイツでは東ドイツ・ベルリンのようなことになつていました。ノスタルジー（郷愁）とオスト（東）をひっかけてオスタルジーといつて。東西の壁が壊れてからもう十四、五年になりますが、それ以降あまり格差は埋まらない。

くんですね。生き甲斐を持つてくる。今まで昔話をするのはいいことではなくて「おじいちゃん、そんな昔のことばかり言つてないでもっと将来のことと言いませんよ」って、そういう言い方をしていた。それは、個人の思い出とか個人の歴史を語るのはつまらないことで、個人のことがわかつても何の価値もなく、社会とか国家のことを考えたり言つたりしましようというのと同じですよね。ノ

しまう。それが冷蔵庫の中の調査※とたぶん結びついていると僕は思つてゐるのね。そこから切り崩していかないと「社会の語り」というのを脱することができます。個人にとってそれが大切なことはない。個人にとってそれが大切なことを素直に大切と思えばいい。何も無理して社会的な語りを身につけなくては、いいのではないかと思つてゐるんです。

田村 僕はむしろ自分が歳をとつたためだと思つていましたけどね。昔のことを恥ずかしげもなく思い出すのは。

佐藤 それは思い出すべきリソースが増えたということでしょう。そう考えたら良いですよ。昔話は楽しいですね。

田村 それも空間がなくてできるわけでも話にもならないんじゃないかな。

佐藤 でも一種の共有体験がないと語り

▲佐藤浩司（さとう・こうじ）

国立民族学博物館助教授。建築人類学・建築史学。1954年東京都生まれ。東京大学大学院博士課程修了。編著「シリーズ建築芸術学世界の住まいを読む」全四巻（学芸出版社）など。



けれど東のほうが懐かしいという話にならかにかけている。日本でも昭和三十年代ブームがあつたりしますが、あまり人間が創造のほうに向かっていない。懐古に傾き、私的な記憶のほうに関心が結集中でいるのかなと思うんですよ。

佐藤 『百歳回想法』（木楽舎）の著者の黒川由紀子さんは、百歳以上のお年寄りを集めて自分の昔話をしてもらつた。するとそれによって老人たちが回復していく

48